

報道関係各位

NHK international, inc.
一般財団法人 NHK インターナショナル

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業 [インドネシア] 企画展 「クリプトビオシス:世界の種」開催のご案内

文化庁が主催、一般財団法人 NHK インターナショナルが企画・運営する「海外メディア芸術祭等参加事業」は、メディアアート、映像、ウェブ、ゲーム、アニメーション、マンガ作品等の優れたメディア芸術作品を紹介するため、海外のフェスティバルや施設において、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に展示・上映・プレゼンテーション等を実施しています。

1月24日から2月15日まで、インドネシア西ジャワ州の州都でありインドネシア第3の都市であるバンドン市のギャラリー「スラサル・スナリヨ・アート・スペース」にて企画展「クリプトビオシス:世界の種」を開催します。インドネシアにおける世界最古と見られる洞窟壁画の発見から着想を得た本展では、生物学において“隠された生命活動”を表す「クリプトビオシス=Cryptobiosis」をテーマに、13組のアーティストの作品を紹介します。

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業(インドネシア) 企画展 「クリプトビオシス:世界の種」

会期:2015年1月24日(土)~2月15日(日) 10:00~17:00 ※休館:月曜日・祝日
※1/23(金)19:00よりオープニングイベントを開催します。

会場:スラサル・スナリヨ・アート・スペース (SELASAR SUNARYO art space)
Bukit Pakar Timur No.100, Bandung - 40198, West Java, Indonesia

入場料:無料

<http://jmaf-promote.jp/global/>

主催:文化庁

共催:SELASAR SUNARYO art space

協力:福岡アジア美術館

企画ディレクター:中尾 智路(福岡アジア美術館学芸員)

事業アドバイザー:吉岡 洋(京都大学大学院文学研究科教授/美学・芸術学)

毛利 嘉孝(東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科准教授/社会学)

企画/運営:一般財団法人NHKインターナショナル

本件に関する問い合わせ先

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業事務局(一般財団法人NHKインターナショナル内)

担当:本間(ほんま)・湧井(わくい)・小山(おやま)

E-mail: jmaf-info@nhkint.or.jp TEL:03-6415-8500 FAX:03-3770-1829

企画展

「クリプトビオシス：世界の種」

会期：2015年1月24日(土)～2月15日(日) 10:00～17:00

会場：スラサール・スナリオ・アート・スペース (SELASAR SUNARYO art space)

<http://www.selasarsunaryo.com/>

スラサール・スナリオ・アート・スペース (SELASAR SUNARYO art space)は、1998年に非営利組織のギャラリーとして設立され、以降インドネシアや海外アーティストの展覧会、上映会などを開催しています。ギャラリーの位置するバンドン郊外の丘陵地帯は、理工系分野で最高学術水準を有するバンドン工科大学にも近く、アーティストも多く居住するエリアです。

文化庁メディア芸術祭では、福岡アジア美術館学芸員の中尾智路氏をディレクターとし、生物学において“隠された生命活動”を表す「クリプトビオシス=Cryptobiosis」をテーマに、人間の潜在能力や記憶、世界に埋もれた存在や価値を甦らせ、私たちに再発見を促す作品を紹介します。

「クリプトビオシス：世界の種」について

企画ディレクター：中尾 智路(福岡アジア美術館学芸員)

2014年における美術史上最大の発見のひとつは、インドネシアのスラウェシ島で確認された世界最古の洞窟壁画ではないだろうか。手のかたちや動物の姿が描かれた古代の壁画は、スラウェシ島の大自然のなかで生きていた人々の、表現し、記録せずにはいられない衝動を、まるでタイムカプセルのように封じ込めている。

そもそも芸術作品とは、たとえそれが古代の洞窟壁画でなくても、作者がある時ある場所で体験した感動を封印したタイムカプセルなのである。そこに秘められた何かが、鑑賞する者との共感によって、再び生命を得たかのように動き始めるという意味において。

生物学では、厳しい自然環境を生き抜くために、動植物がその生命活動を一旦停止させることを「クリプトビオシス(Cryptobiosis)：隠された生命活動」と呼ぶ。数千年前の種から発芽したハスの花や、宇宙空間に数日放り出されても死ななかつたクマムシは、クリプトビオシスの驚くべき実例といえるだろう。つまり、クリプトビオシスとは復活することが前提となった休止であると同時に、生き残るための手段なのである。

ここではクリプトビオシスという生物学的な現象を、人間の社会的な活動やメディア芸術に敷衍することで人間の潜在能力や記憶、あるいは新旧の様式や技術、あるいは芸術の源泉として自然やアーカイブについて考えてみたい。そのために、文化庁メディア芸術祭のこれまでの受賞作品から、わたしたちの世界のどこかに埋もれ、その存在や価値が忘れ去られたものを、何らからの方法で甦らせようとする作品に焦点を当て、インドネシアのバンドンという場所に一堂に会してみようと思う。

中尾 智路 NAKAO Tomomichi

福岡アジア美術館学芸員／平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭選考委員

主な担当展示に「第5回福岡トリエンナーレ」、「アジアをつなぐー境界を生きる女たち 1984-2012」など。

出展作品

第1章 呼び起こされる記憶、潜在能力

第1章では、普段私たちが意識することのない人間の記憶や潜在能力について考えます。遠い過去の「曖昧な記憶」を甦らせようとする作品や、人間に本来備わっている「潜在能力／可能性」を示唆するような作品を紹介します。

■山本 良浩『Que voz feio(醜い声)』

[2011/映像インスタレーション/第15回アート部門大賞]

別々の場所にいる双子の女性が、幼少期のある日の出来事について語り出す。しかしその内容は、同じ日に体験した同じ出来事のはずなのに、不思議と食い違い、やがてまったく違った結末が露わになっていく。遠い昔の曖昧な記憶。しかしその記憶は母親やその後の人生のなかで上書きされ、定かではない。私たちが確実だと思っていた世界が不意に揺らぐ。



© 山本 良浩

山本 良浩 YAMAMOTO Yoshihiro

千葉生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒業。IMI 大学院スクール修了。東京藝術大学先端芸術表現専攻修士課程修了。イメージフォーラム・フェスティバル 2011 のジャパン・トゥモロー(一般公募部門)にノミネート。イメージ、音、文字、展示形式など、映像を「見る」という行為を異なる認識の多重体と捉え、短編映像作品とインスタレーションを制作。http://yoshihiroyamamoto.com/

■最後の手段 『Her Ghost Friend 「放課後のシソーラス」』

[2011/ミュージックビデオ/第17回エンターテインメント部門新人賞作家]

人々の太古の記憶を呼び覚ます 3 人組のビデオチーム「最後の手段」によるミュージックビデオ。Her Ghost Friend の楽曲「放課後のシソーラス」にあわせて、色鮮やかな物語が展開。おばあさんの後頭部を直撃したゲートボールの玉は、淡い初恋の思い出を飛び越え、あなたを生命と愛の壮大なデイドリームへと誘う。



©MV「放課後のシソーラス」(2012)/Her Ghost Friend

最後の手段(有坂 亜由夢/おいた まい/コハタ レン) Saigo No Shudan (ARISAKA Ayumu / OITA Mai / KOHATA Ren)

○有坂 亜由夢:

1985年、千葉県生まれ。映像作家。東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻卒。2007年、EPSON COLOR IMAGING CONTEST 大竹伸朗賞。08年、同佐藤卓賞。12年、東京藝術大学 サロン・ド・ブランタン賞、杜の会賞、アートアワードトーキョー丸の内 佐藤直樹賞。

○おいた まい:

1986年、アメリカ生まれ。東京藝術大学先端芸術表現専攻卒。デザインワークを中心に活動中。

○コハタ レン:

1981年、東京都生まれ。東京藝術大学先端芸術表現専攻卒。作家として活動中。

■菅野 創／山口 崇洋『SENSELESS DRAWING BOT』

[2011/インタラクティブアート/第15回アート部門新人賞]

グラフィティにおける描画プロセスのダイナミズムや即興性、記号性といった要素のみを提示する、意識も主張もない不完全無血のドローイングマシン。しかし人間と同じく二重振り子の腕をもつこの機械は、人間の骨格自体に備わっていて、すべての人に隠された素晴らしい能力を暗示しているのではないかと。どんな人でも、どんな考えをもっている、いなくても、美しく描くことができるという能力を。



photo: Yohei YAMAKAMI © So KANNO, Takahiro YAMAGUCHI

菅野 創／山口 崇洋 KANNO So／YAMAGUCHI Takahiro

○菅野 創:1984年生まれ。情報科学芸術大学院大学(IAMAS)メディア表現研究科メディア表現専攻修了。電子回路やプログラミングを用いて、複数のテクノロジーの特性を結びつけることにより新たな表現を生むことを目指して作品を制作している。<http://kanno.so/>

○山口 崇洋:1984年生まれ。多摩美術大学大学院デザイン専攻情報デザイン領域修了。身体性の伴った文字表現や、公共性などを主なキーワードにデジタルメディアを基盤とした研究・制作活動を展開。<http://yang02.org/>

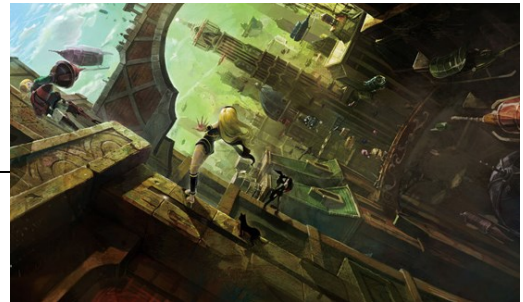
■外山 圭一郎

『GRAVITY DAZE/重力的眩暈:

上層への帰還において、彼女の内宇宙に生じた摂動』

[2012/ゲーム/第16回エンターテインメント部門優秀賞]

「重力が働く方向」を自由に決め、あらゆる方向に「落ちる」ことができる、新感覚のアクションアドベンチャーゲーム。空中都市「ヘキサヴィル」で目覚めた記憶を失った少女「グラビティ・キトウン」は、謎の黒猫「ダスティ」によって重力を操作する力を得て、数々の試練を乗り越え強く成長していく。



©2012 Sony Computer Entertainment Inc

外山 圭一郎 TOYAMA Keiichiro

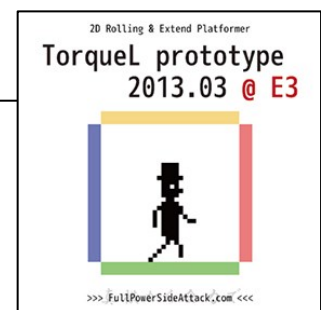
1970年、宮崎県生まれ。東京造形大学卒業後、『SILENT HILL』『SIREN』シリーズを制作し、日本を代表するホラーゲームクリエイターとして知られる。『GRAVITY DAZE』では心機一転、これまでとまったく異なる作品世界へのチャレンジとなった。

■なんも(柳原 隆幸)『TorqueL prototype 2013.03 @ E3』

[2013/ゲーム/第17回エンターテインメント部門新人賞]

従来のアクションゲームで使われているジャンプやダッシュといった移動方法を取らず、プレイヤーとなる箱の回転と変形を利用してゴールを目指す2Dアクションゲーム。膨大な作品数のある2Dアクションゲームにおいて、今までにないユニークなゲームデザインにより、簡便な操作でプレイヤーに新鮮な感覚を与えながら、幅広いレベルデザイン(ゲーム中の空間や環境、難易度の構成)を確保することに成功している。

(PlayStation®4/PlayStation®Vita 版 2014.12.24 配信開始)



©2013 FullPowerSideAttack.com All Rights Reserved.

なんも(柳原 隆幸) Nanmo (YANAGIHARA Takayuki)

1984年、北海道生まれ。2012年、2年連続でセンス・オブ・ワンダー・ナイトに出場したのを機に FullPowerSideAttack.com としての活動を開始。13年、第1回ニコニコ自作ゲームフェス Unity スタークリエイター賞、Intel Level Up 2013 Best Physics などを受賞。<http://www.torqueL.net/>

■五十嵐 大介『海獣の子供』 [第13回マンガ部門優秀賞]
〈複製原画展示〉

夏休み早々部活禁止になってしまった少女、琉花は「海」と名の不思議な少年と出会う。水族館の大水槽で自由自在に泳ぐ海の姿に心奪われた琉花は、彼が「空」とともにジュゴンに育てられた少年であることを知る。その頃、隕石が海に落ち世界で魚が消えていた。海の神秘は深まり、地球の命の物語へと広がってゆく。

五十嵐 大介 IGARASHI Daisuke

1969年生まれ。1993年「月刊アフタヌーン」(講談社)で四季大賞を受賞してデビュー。2002年自らの自給自足体験に裏打ちされた『トル・フォレスト』を発表、注目を集める。2004年『魔女』で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞。



©五十嵐大介 / 小学館 IKKI

第2章 還流するテクノロジー

第2章では、新旧の様式や技術によって甦る表現に着目します。紹介する作品は、どれもアナログなものへの愛着を感じさせます。しかし、彼らの作品はアナログやデジタルというメディアやそれを支えるテクノロジーに対して、人類史的に俯瞰する視点を持ち、新旧世界を自在に行き来しようとしています。

■La Societe Anonyme(フランス)『The SKOR Codex』

[2013/グラフィックアート/第17回アート部門新人賞]

現代の生活や文化を書籍化し、何世紀か先に伝えるために世界各地へ届けるプロジェクト。現代の生活や文化の多様性を描写している画像と音のファイルを2進コードに変換し、そのデータを紙とインクを用いることで、印刷して残す。データの老朽化や、ハードウェアの損傷を思えば、何世紀も先へ残すメディアとして、「本」の形式が安全であることを示唆する本作は、未来の知的生命体や地球上の人類に向けられている。

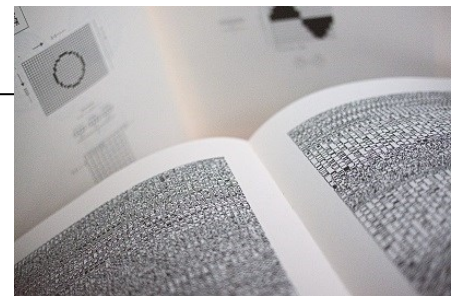


Photo: La Societe Anonyme Published under CC0 (Public Domain)
Courtesy: Koninklijke Bibliothek, Den Haag, 2229 R 20

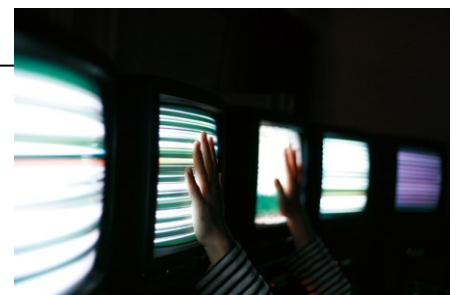
La Societe Anonyme

La Societe Anonyme は après la lettre という団体方式のアヴァンギャルド・アート集団である。文化が商品化されている状況を受けて、アートの制作、普及、持続のための代替手段を探求している。La Societe Anonyme のメンバーは、Dusan BAROK、Danny van der KLEIJ、Aymeric MANSOUX、Marloes de VALK である。http://societeanonyme.la/

■和田 永『Braun Tube Jazz Band』

[2009/パフォーマンス&インスタレーション/第13回アート部門優秀賞]

「ある日、捨てられた電化製品がとある町のストリートで楽器として演奏されているという光景が脳に浮かんだ」。これを出発点に、ブラウン管テレビとPC制御したビデオデッキを音階の数並べた、ガムラン打楽器セットが制作された。複数のブラウン管を叩くことで、原始的かつ惑星的電気音楽を演奏する。



© 2009 和田永. All rights reserved.

和田 永 WADA Ei

1987年生まれ。大学在籍中よりミュージシャンとしても活動。旧式のオープンリール・テープレコーダーやブラウン管テレビなどの古い電化製品をコンピューターで制御し、生楽器やその場でテープに録音した音を組み合わせる音楽作品の発表やパフォーマンスを行なう。

■稲葉 卓也『ゴールデンタイム』

[2013/短編アニメーション/第17回アニメーション部門優秀賞]

舞台は、好景気に沸いた1980年代の日本。ある日、長年使われてきた60年代製の家具調テレビが廃品置き場に捨てられてしまう。テレビは捨てられたことを受け入れられず廃品置き場から脱出を試みるのだが……。テレビがたどった数奇な運命を人生に重ねてつづるストーリー。悲喜劇を通して、テーマである「生きることの肯定」が描き出される。



©ROBOT

稲葉 卓也 INABA Takuya

1976年、三重県出身。アニメーション作家。京都精華大学卒業後、2002年より株式会社ロボットに所属。NHK・BSのキャラクター「ななみちゃん」のキャラクターデザイン及びアニメーションをはじめ、テレビ番組、CM、PV、絵本などを手がけている。

■Bagus Pandega(インドネシア)『(expanding) Listening to The Silence』

[2013/メディアインスタレーション]

人は何か答えを探している時、独りになって内省したいものである。この作品はそういった自己の瞑想をテーマに制作している。自分自身の心と向き合う時に静寂は必要となり、またその静寂との交信が生まれる。本展では元の作品『Listening to The Silence』をインスタレーション用にアレンジしたものとなっている。



©Bagus Pandega

Bagus Pandega

1985年、ジャカルタ出身。音や光を扱い、キネティックアートを制作。2008年バンドン工科大学芸術デザイン学部彫刻科卒業後、2012年にラ・ロシェル/フランスにてLe Centre Intermondosのレジデンスに参加。現在、バンドン工科大学大学院芸術デザイン学部在籍中。

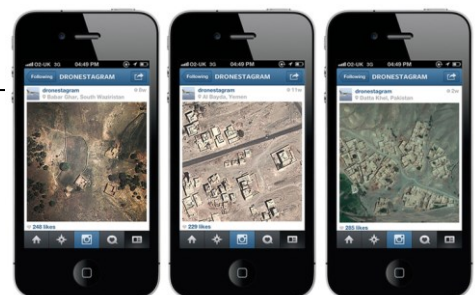
第3章 芸術のリソースとしての自然、アーカイブ、ビッグデータ

かつて芸術家たちは自然のなかに理想の美を見出し、それを芸術作品として永遠に留めようとしました。ここで紹介する作品は、自然はもとより、コンピューターやインターネットによって集積される膨大なデジタルデータを芸術のリソースとして、新しい現実を立ち上げようとしています。

■James Bridle(英国)『Dronstagram』

[2012/ウェブサイト/第17回アート部門優秀賞]

無人航空機(drone)に攻撃された人目につかない風景を、調査された報道記事、地図データ、ソーシャルメディアを通じて明らかにするプロジェクト。宣戦布告なき戦争や暗殺計画では無人航空機(UAVSやdrone)が実際に使われているが、戦場は私たちの目に触れないからだけではなく、技術的、政治的背景のため最近までこの事実が注目されることはなかった。



©James Bridle.

<http://instagram.com/dronstagram>

James Bridle

英国、ロンドンを拠点に活動する作家、アーティストであり出版者。作品はウェブサイトで見ることができる。

■新津保建秀＋池上高志『Rugged TimeScape』

[2010/デジタルフォト/第14回アート部門審査委員会推薦作品]

写真家の新津保建秀と複雑系科学の研究者、池上高志の共同制作。高解像度のデジタル画像データとして保存された、光、雲、森などの膨大な断片が、引き延ばされ、折り畳まれる。高度なプログラムを経て、解体、再構成されていく風景の中に、視覚では認識できない時間やテクスチャーが現れる。



©新津保建秀＋池上高志

新津保 建秀 SHINTSUBO Kenshu

1968年東京生まれ。写真家。映像・写真・フィールドレコーディングなどによる制作とともに、建築・文藝・音楽・情報デザインなど領域を横断したドキュメントと共同作業を多く手掛ける。http://www.kenshu-shintsubo.com/

池上 高志 IKEGAMI Takashi

複雑系科学研究者/東京大学教授。現在は東京大学大学院総合文化研究科教授として教鞭を執る傍ら、複雑系科学研究者として、アートとサイエンスの領域を繋ぐ活動も精力的に行う。http://sacral.c.u-tokyo.ac.jp/

■Syaiful Aulia Garibaldi (インドネシア) ※出展作品は決まり次第、公式ウェブサイトでお知らせします。

Syaiful Aulia Garibaldi

1985年、ジャカルタ出身。農学部卒業後、バンドン工科大学で版画専攻をしたバンドン在住のインドネシア人作家。独自の言語を創作し、現存する生態系との関係を模索することで既存のマテリアルを崩し、新たな再構成を試みる。

特別展示：出展作家による新作発表

世界最古と見られるインドネシア・スラウェシ島にある洞窟内の壁画に、本展参加アーティストの山本良浩とSyaiful Aulia Garibaldiが実際に赴き、そこでのリサーチを基に新作を発表します。

リーディングルーム

家具提供：UNKLI347

展示会場の中央に位置するリーディングルームでは、第15～17回のマンガ部門受賞作品を中心におよそ130冊のマンガ(日英)を楽しむことができます。このほか『ゴールデンタイム』の上映用モニタと、『TorqueL prototype 2013.03 @ E3』の体験ブースも設置します。

イベント

会期前日には、本展の開催を記念したオープニングイベントを開催。また、会期中には、研究者や出展アーティストが出演するレクチャーや、出展アーティストを講師としたワークショップも開催する予定です。

■オープニングイベント「和田永による Braun Tube Jazz Band」

出演：和田 永(出展アーティスト)、Bandu Darmawan (アーティスト)

日時：1月23日(金) 20:00 会場：Rang B ※申込不要

本展のオープニングを記念し、和田永によるブラウン管テレビを演奏するライブ・パフォーマンス『Braun Tube Jazz Band』を開催。バンドン工科大学出身、音やプログラミングを用いた作品を主に制作しているインドネシア人アーティストBandu Darmawanも音響効果で参加します。終演後、展示作品である『Braun Tube Jazz Band』の演奏を来場者も体験することができます。

■レクチャー & アーティストトーク「太古から続く人間の芸術表現 — 洞窟壁画を通して考える —」

モデレーター：中尾 智路(企画ディレクター)

出演：Pindi Setiawan(バンドン工科大学教授)、山本良浩(出展アーティスト)、 Syaiful Aulia Garibaldi (出展アーティスト)

日時：1月24日(土) 15:00～17:00 会場：Bale Handap ※申込不要

2014年、世界最古であるとされる壁画が描かれたスラウェシ島の洞窟をはじめ、世界中に存在する手形や動物の古代壁画は、人種を越えた人間の表現方法を示唆しています。古代壁画の制作の目的は何だったのか。社会とどういった関わりがあったのか。そして、この歴史的事実はアジアの美術史に光を当てる展望になりうるのか——。バンドン工科大学教授であり、洞窟画の専門家でもあるPindi Setiawan氏を迎え、美術史的観点から解説を行います。また、実際に洞窟に訪問し、本展のために新作を制作したアーティスト、山本良浩氏とSyaiful Aulia Garibaldi氏が洞窟来訪と作品についてのトークを行います。

■ワークショップ「人とロボットのセンスレス・ドローイング・コラボレーション」

講師：山口 崇洋(出展アーティスト)

日時：2月15日(日) 15:00～16:30 会場：Ruang Sayap 対象：現地アーティストや小学生 定員：10名 ※先着順

出展作品『SENSELESS DRAWING BOT』と現地のグラフィティライター、アーティスト、小学生とのコラボレーションを試みるワークショップ。会期中に『SENSELESS DRAWING BOT』が描いたダイナミックなドローイングに、人間(参加者)がスプレーを使って思い思いにドローイングを描き足していき、最終的に一つの壁画作品を完成させます。マシンによるドローイングと、人間によるドローイングには、どのような違いが見られるのか、実際のドローイング体験を通して考えます。

関連上映

会期中の土・日に文化庁メディア芸術祭の受賞作品等を紹介する映像プログラム6本を上映します。

■文化庁メディア芸術祭 受賞作品上映 会場： Bale Handap ※申込不要

2月1日(日)

13:00 「Animated Short Program 2014 —短編アニメーション 2014」

平成25年度[第17回]文化庁メディア芸術祭アニメーション部門において受賞・審査委員会推薦作品に選出された、バラエティ豊かな短編アニメーション10作品を紹介します。

14:15 「The Q of moving-image —映像表現が問いかけるもの」

映像表現ならではの物語性とドキュメンタリー性を強く有し、歴史や現実を不断に問いかける6作品を紹介します。

2月7日(土)

13:00 「Beyond the Technology —デジタル技術を越えて」

デジタル技術は進化を続け、それを駆使した表現は現代の豊かな“多様性”を実感させます。本プログラムでは、作家の感性と、現代において共有されている想像力を映し出す13点の作品を紹介します。

14:00 「Portrait of Japanese Animation —日本の映像描写」

日本ならではの独特の世界観や感情描写の表現、現代日本の日常を反映したアニメーション作品、ミュージックビデオ、映像作品9点を紹介します。

2月8日(日)

13:00 「JAPAN POP ENERGY」

文化庁メディア芸術祭の歴代受賞作品の中から、現代日本のポップカルチャーが感じられる作品群を集めてお送りします。

2月15日(日)

13:00 「Beautiful drawing —ハンドドローイング～その無限の世界」

磨き上げられた完璧な表現としてのハンドドローイングのアニメーション10作品を紹介します。

参考

文化庁メディア芸術祭について

文化庁メディア芸術祭はアート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。平成9年度(1997年)の開催以来、高い芸術性と創造性をもつ優れたメディア芸術作品を顕彰し、受賞作品の展示・上映や、シンポジウム等の関連イベントを実施する受賞作品展を開催しています。本年度[第18回]は、国内応募数過去最多の2,035作品、世界71の国と地域から3,853作品の応募があり、文化庁メディア芸術祭は国際的なフェスティバルへと成長を続けています。また、文化庁では、メディア芸術の創造とその発展を図ることを目的に、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を国内外で広く紹介する多彩な事業を実施しています。海外・国内展開や創作活動支援等の関連事業を通じ、次代を見据えたフェスティバルを目指しています。

■文化庁海外メディア芸術祭等参加事業

本事業は、世界各地のメディア芸術関連施設やフェスティバル等にて文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に上映・展示・講演を行う文化庁メディア芸術祭の関連事業です。



平成25年度[第17回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展



海外メディア芸術祭等参加事業(FILE2014)展示風景

平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭

作品募集 2014年7月7日(月)～9月2日(火)
 受賞発表 2014年11月28日(金)
 受賞作品展 2015年2月4日(水)～2月15日(日) ※2/10(火)休館
 会場:国立新美術館(東京・六本木)他
 ウェブサイト <http://j-mediaarts.jp>
 Facebook <http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>
 Twitter @JMediaArtsFes

